
高良一'sクエスト

ばななあいす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高良ー's クエスト

【Nコード】

N13510

【作者名】

ばななあいす

【あらすじ】

どこにでもいそうな少女、高良。

普通に友達がいて、普通に充実していて。

そんな高良のびっくりするような非日常。

高良はこんなものを望んでいたのか…

いや…いなかったのか…。

ちよつと不思議なファンタジー。

四人で書いているため

若干違った感じを楽しんでください。

始まりは何故かトイレから（前書き）

< 注意 >

この小説はたくぼん、バナナンヌ、
かいとん、のぶてるの四人で書いています。
文の終わりにある<たくぼん>などは
そこまで書いた人の名前なので
お気になさらないでください！
二巡目から、頭文字だけになります。

ではノシ

始まりは何故かトイレから

「……ということであな達、
トイレ掃除の当番をやってもらおうかしら。」

空はいつも通りの青でして、今日という日は、
特に何も起こらず、放課後を迎えた。

……ウソ。

前言撤回。

非日常には到底到しないが、
嫌な出来事なら、今…起きようとしている。

「えー。」

「はあ、意味わからんし。」

「なんでうちらだけしやなあかんの？」

各々が不満の声を上げる。

それもそのはず。

私だって、皆の声に混じり、不満を吐き出していた。

帰り際に下された、トイレ掃除という命令。

しかも、選ばれたメンバー、全員が先生との

じゃんけんに負けた運無きクラスメイト達。

自分を入れて、総勢8名。

あーあ。面倒くさい。

運はなくとも、バカではない。

ここにいる誰もが、椎名先生がもう聞く耳のない事。

この不満講義が時間を食うだけの事は知っているし、
ちやっっちゃと終わらせて帰りたいものだと思っている。

突然編成されたパーティー御一行。
不満顔でのろのろとトイレへと直行。

「よし。うちここ担当ー！」

はし、決定ー！ー！」

誰も使っていない。

放課後は人気のなくなったトイレに高橋アヤの声が響いた。

彼女は真っ先に一番人気がない故、一番綺麗な個室を、

自分の担当場所に決定した。

すると、今までブスツツと口を開かなかったメンバー全員、

ハッと目覚めたかのように急いで自分の担当する場所を指定し始める。

出来るだけ、掃除が面倒くさくない場所を探して。

「ウチ、ここー。」

「じゃあ、あたしココで。」

アヤに続き、急いで声をあげて宣言したのは、

井森ユズキと田川ミキ。

順に奥ばかり埋まっていく。

「えっと、うちは……。」

自分も早く決めなくては。

そう焦りながらも冷静にどこが残りで一番ましか
見極める。

……どこも汚いな。

まあ、ひとつと言える事。

右側の手前から三番目は絶対に嫌だ。

さっきちらりと見た。

いや、見るまでもなかった。
異臭。

このトイレ全体に漂う異臭の原因はあそこからする。
きつと白い便器の上には…想像もしたくない。
自重します。

そこまで考え、
自分は左側の手前の一番目の個室を掃除しよう！
と高良は思った。
そして、宣言するべく、口を開けた瞬間。

「……はいつ！高良時間切れー！
君は右の三つ目。
花子さんの出てくるあのトイレに決定ー！」

高らかな宣言は、ものの見事にアヤにとられてしまった。
「ちよつ、そんな勝手に。」
嫌だ！絶対にあそこは嫌だ！
なんとか取り消そうとするが……
どうやら自分には誰一人味方がいないようだ。

「それでいいんじゃない？」
「うわー。高良さん。」
「ガンバー！」

「まー残念だね。ドンマイ。」
笑いを含んだ声で高橋賛成派である乃木ユイナ、関根マコト、栢山
ルカ、楠ミサキは、
残りの個室を埋めながら言った。

「はあ……。分かったよ。」
「うちがすればいいんでしょ。」
別に空気が読めないわけじゃない。

高良は、他のメンバーがブラシを取る中、

+ バキュームを持って指定された個室へとほとぼり向かった。 > た
くぼん >

トイレには秘密？が？

「うっ。」

トイレは想像できないような悪臭だ。

「うちマジでここなん？」

てか、どうやってココ掃除すんねん…。」

「それで良くない？」

ミキはバキュームを指定した。

「えっ！これ？無理やる。」

「なんでもいいからしろや。」

高良はしぶしぶバキュームを持ってブツを掃除しようとした。

その時……、

「うわっ。」<バナナン又>

わっど驚くぐらいの臭いに思わず、

持っていたバキュームを手放してしまった。

大量に排出された 臭いの原因であるそのものの中に

見事にバキュームはまるで浸かるように落っこちてしまう。

うんこ……それが臭いの元。

今となつては自分が世界で一番憎きもの。

「な。な、なんてことだよお！！」

大声で叫ぶと現状突破出来るかなと思いつきり絞り出してみるが、
現実世界はそう甘くなく、

私のバキュームたんは未だまみれたまんま。

……ま、まさかな。

柄の部分から先まで全部うんこまみれに

すっばりフィットしているなんて…ええええ！？

えらいことや…。

やっつてもうたわ。

私、死のう、いや…死のう。

「うわっ…うんこまみれや!!!」

やや後ろから聞こえた声に便器から視線を向けると、マコトが自分を憐れんだ目で見ていた。

タンバリンでどつきまわしたるか、ムカツク。

苦しい胸の内を明かさず笑顔を見せる私、

ガチで主演女優賞頂けるわ。

「わー。これはヒサンや。」

「やっつてもーたな。高良。ご愁傷様。」

「まあ、きつたなっ。キモイ。」

いろんなコメントを残して皆が

見下した目で自分を見ていく。

苦しすぎる…うんこまみれバキュームどうしよう。

うんこついたまま手で掴む？

無理…いや、考えてみる…

イヤ、考えてもやっぱ無理やろ…。<カイトン>

泣きそうになっていると、

廊下から先生の声がトイレ内に響いた。

トイレの各個室からも声がかかる。

「高良、急げよー。」

周りを見回すと、

既に手を綺麗に洗った皆が立っていた。

ああ、清潔そう。

羨ましい…というか、

若干綺麗なトイレを掃除した点から恨めしい。

「高良。」

催促するようにアヤが声をあげた。

よし。
女、高良、心に決めて…手は洗えばいいんだし…。
勢いよくバキュームを手に取り、引っ張った。

スポン

と抜けてくれれば良いのに、
ぴったりくっ付いてしまったらしく、なかなか抜けない。
ほんま腹立つ。
あまり触りたくない柄をもう一度きつく握り直し、
先ほどより力を入れて引っ張った。

ポコン

スポンよりポンより間抜けな音がトイレ内に響く。
「え…ちょ…。」
思いの他、力を入れすぎたみたいで
後ろによるめく。
いや…。
トイレでこけたくない。
あ…。
つるんと後ろに尻もちをついたはずなのに、
そこは床ではなかった。

「えっ…ちょ…。何やのん？これ？」
的確に言う空間。
下にすうーと伸びている。
まあ、正直下を見たわけじゃなかったが、
落ちている感覚で。
でも…、なんか、

落下速度が異常に速い。

自分の短い髪が上に靡いている。

叫ぶように出す声も上に流れ、消えていく。

なんか、アリスとか読んでも、

こんな落下じゃなかった様な気がする。

周りに机があったり、イスとかおやつとか、本とか…

「ぎゃっ。」

色々と頭の中で巡らせているうちに

下に落ちた。

下に着く前にゆっくりになるとか、

下に敷物があるとか、

全く心遣いが感じられない床に…。

高良はじんじんと鈍く痛むお尻を撫でながら立ちあがった。くのぶ
てる>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1351o/>

高良一'sクエスト

2010年10月18日08時54分発行